

## 妖伝説～白銀の狐と人間の恋物語～

ば、と瞳は腹を括った。

「好きに決まってるでしょ、馬鹿！！！！！！！！！！」

鼓膜が破れないぐらい大きな声で、耳元で返事をしてやったのだった。

この世は不思議に溢れている

100年ほどしか生きられぬ人間と何百年と生きられる妖が心を通わす  
こともある

それは噂となり、語り草となり、物語となり、伝説となっていく

この二人の話もまた、妖の中で伝説となっていくだろう

陰陽師のような少女と自由な妖狐の男が結ばれ、人間にも妖にも祝福さ  
れる二人の物語・・・



女を、穢れ切った男が触れている。穢れを知らぬ少女を穢そうとしている。その光景に桐伏は怒る感情を抑えられなかった。

「や、やだ、だれか・・・やだあ・・・!!」

「いい子だからさあ、大人しくしてねえ・・・ひっ!? あがつ!?」

「っ・・・?・・・えっ?」

少女は叫び声と男の指が離れていったことに驚いて、固く瞑っていた目を開け、そろりと見上げた。そこにあつたのは、桐伏に頭を鷲掴みにされ、宙にぶら下がっている男だった。

「ひぎああっ!! 痛い!! やめ、頭が割れ!!」

「いつそのこと割れると言いたいが、この子の前で血を見せたくない。そこで大人しく、しているろ!」

「くはあ!!」

ぶんと桐伏が男を投げ、男が壁を突き破る。そのまま動かないのは気が失ったからだろう。桐伏はあとで手でも洗おうと考えつつ、少女に向き直る。少女は瞬きもせずに桐伏を見上げていた。桐伏は恐怖で怯えているだろう少女を落ち着けようと思い、傍らに膝をつき、懐に入れていた葉を口に当てる。

・・・~~~~~

草笛の音色に少女がポカンとする。そして、安心からか意識を失い、体が後ろに傾いていくのを桐伏が男に触らなかつた方の腕で抱きとめる。

「安心して気を失ってしまったか・・・無理もない。こんな幼子には酷な出来事だったからな。」

片手で少女を抱き上げ、桐伏は小屋を出る。少女を入口すぐにある草の上に寝かせ、桐伏は重ね着していた衣を一枚脱ぎ、少女が寒くならないようにとかけてやる。

「おい、こつちで大きな音が・・・」

「このあたりにそういえば小屋が・・・」

「!・・・この子を探しに来た人間達か。見える者はいないと思うが・・・」

念のためにと桐伏は近くの木の上に跳び、様子を窺う。現れたのは警官と少女と共に公園に居た少年、それから少女の両親と思われる男女だ。

「あ、ひとみ! おばさん、おじさん!」

「瞳! 瞳、しつかりして!」

警官が止めるのも聞かず、母親らしい女性が少女に駆け寄る。父親と思しき男性も追いかけ、少年もそれに続く。

「お嬢さん、怪我などは?」

「ないみたいです! ああ、よかつた・・・本当によかつた。娘にもしものことがあつたら・・・!」

母親が未だに気を失う娘を抱きしめ、無事であつた喜びの涙を流す。その肩をそつと抱く異国人の父親も安堵の笑みを浮かべている。本当に愛されているのだと周りにも伝わる。それは当然、陰で見ていた桐伏にも。

(瞳、というのか・・・一人娘なんだろうか、本当に愛されている子だ・・・)

「・・・おい、こつちから桐伏様の気配が・・・」

「早く他の者を集めて・・・」

(!・・・追っ手が来たか、あの子を巻き込む訳にはいかない・・・だが、いづれ・・・いづれ、会うことができれば・・・)

追っ手の妖狐の気配を感じた桐伏は、少女達を悟らせないために別方、向へと木を跳んでいく。一瞬、横目に少女の姿を収めてから、前を向き、眩く。

「穏やかな時間をくれた、その恩を返したいものだ・・・」

## 第十五章 君と共に歩む伝説へ

全てを聞いて、瞳はわかつたことが何個かあつた。

「じゃあ、探していたのは私で・・・あの青い衣は貴方のだったのね。そういえば左腕のところが少しだけ切れていたわ。」

「ああ。そういえば見回りのときに着ていたな。役立っていたようですよ。よりだ。」

「花菜のときに助けてくれたのは、その恩? だったの?」

かし、自分の存在が知られることはないだろうと思い、目を閉じて少し休もうと思っていたところだった。

「だあれ？」

閉じかけていた視界に少女が現れ、桐伏は驚いた。まさか自分が見える人間が居ると思っていなかったところに問いかけられ、困惑する。ふと、少女の視線が自分の顔から左腕に移る。

「み……」

「？」

「みず！おみず！」

そう叫ぶように言った少女は、慌てて来た道を引き返していった。怖くなった、とは少し違う感じだったために、桐伏はある意味で安心したが、同時に、自分の場所を悟られるのではないかと冷や冷やした。

（追っ手が気づいた気配はないな……しかし、驚いた……昔ならばともかく、今世に俺達を見ることのできる人間がいたとは……いや、幼子は人ならざる者に機敏であると言うし、そのせいだろうか……）

「きつねさん、だいじょーぶ？」

考え込んでいる内に少女が掌に水を少し貯めて傍らに立っていた。途中で零したらしく、服や水道までの道のりに水玉模様ができあがっていた。どうやら、左腕の血を流すために持ってきてくれたのだろう。

「……ああ、大丈夫だ。わざわざ水を持ってきてくれたのか？」

「けがをしたらみずであらいますようにしてきませんか？」

「そうか。ありがとう。」

何気なしに礼を言えは、少女は陽だまりのように眩しい笑顔で水を差し出してくる。その水を右手に落としてもらい、左腕の傷口を洗う。もちろん、小さい手にあった少量の水なので全ての血を流せる訳ではないので、いくらかマシかなと思える程度だ。

「ここで、遊んでいたのか？」

「うん。きつねさんは？」

「俺は……追いかけてしまっているんだ。見つからないように隠れていたら、枝で怪我をしてしまったらしい。」

追いかけること言うには、少女の思っているような楽しいものではない。

だが、こんな穢れを知らぬ少女に血生臭い話ではできないので、桐伏はもっともらしい話をでっちあげたのだ。そして思惑通り、少女はそれを信じた。

「じゃあ、おにさんみたいなひとみかけたらいうね！また、おみずもってくる！」

「ああ。ありがとう、優しいな。」

少女は再び水を汲むために、今度は遊びに使っていたのか飲料のために持ってきていたのか定かではないペットボトルを滑り台まで取りに行つてから水道まで行った。水を汲んでいる姿を一瞬、視界に収めてから桐伏はふと息をついて目を閉じる。

（こんな穏やかな時間は久しぶりだ……）

父を兄に殺され、母は父の後を追うように自殺し、兄は罪妖となり、兄と母の間に産まれた罪なき弟は甥でもあることに悩み、なりたくもない次期長に選ばれてしまい、桐伏は心が落ち着ける状況ではなかった。今も追っ手に見つかるといれないという緊迫した事態ではあるのだが、幸い、遠くに行つたようで気配を感じない。

（あの幼子のおかけか……何かしら礼ができればいいんだが……）

「きゃああ……！」

穏やかな時間を引き裂く、自分を助けてくれた少女の悲鳴。桐伏はすぐに目を開け、少女がいるはずの水道に目を向けた。そこには少女ではなく、同じ年くらいの少年が居て、何処かに向かつて走り出そうとしていた。その方角に目を向ければ少女を車の後ろ席に放り込み、運転席に乗り込もうとしている中年の男がいた。

（人攫いか……！）

そう確信した桐伏は瞬時に立ち上がり、屋根に飛び上がって車を追う。流石に車には追いつけないが、郊外に出るという予測を立て、さらには植物に聞きながら桐伏は誰よりも早く少女が監禁されている小屋が街はずれにある森に入つてすぐにあることをつきとめたのだ。

（ここか……あの子は無事だろうか……）

小屋を見つけ、桐伏はそつと中を窺う。そこには今まさに恐怖で涙を流している少女を襲わんとする男の姿があった。あの優しく愛らしい少



### 第十三章 終わりは始まり

「・・・これが、真実だ。」

語り終わった木犀の前には俯いている桐伙、茫然としている楓。そして、自分たちが始末しようとした瞳が立っている。

「そうですか・・・母上が父上を・・・」

「何故そうしたのか俺にはわからん。ただ憶測しかできないが・・・きっと、父と共に逝きたかったのだと思う。殺された者達が逝く場所と自らを殺した者が逝く場所はきつと違うのだろう。百合は俺に殺され、父上は百合に殺された。二人とも殺された者だ・・・俺が・・・場所だ・・・」

「親父!？」

何か呟いたあと、油断している桐伙が操っていた植物を振りほどき、木犀は楓の傍にいた瞳の元に跳んだ。近くにいた楓もそうだが、瞳も驚いた。同時に油断していたため、その場から動けなかった。

「・・・すまなかつたな・・・」

「えっ・・・」

瞳の耳元で謝罪した声が聞こえた。同時に少し暖かい何かが瞳の顔を濡らした。地面が紅く染まっていく。木犀から音もなく沢山の茎が伸びている。

「兄上っ!？」

「親父!！」

木犀は呟いていた。自分が逝けない場所だと。自殺する木犀は梅雨華と百合が逝ってしまった場所には逝けないのだと。

そして、瞳に謝った。妖狐の争いに巻き込んでしまったこと。桐伙を森に戻すために傷つけてしまったことを。

「兄上!！」

「親父!親父!！」

「お前が・・・立派になった・・・ら・・・こうする・・・つもり・・・ごほっ、だった・・・楓・・・お前の・・・父親にな・・・れて・・・よかつ・・・」

「・・・親父?なあ、親父!！」

木犀は最期に微笑して、目を閉じた。沢山の百合の花をその身に咲かせて。

桐伙はただ、兄上と呼んでいた。楓は目に沢山の涙を溜めて、親父と叫びながら木犀を揺らしていた。瞳は茫然とそのやりとりを見ていた。

(百合の花・・・)

どういう原理で木犀が死んだか、瞳にはわからない。ただ、一つだけの中しているであろう憶測があった。

(誰かに殺されたかったのだろうか・・・彼は、百合さんと同じ場所に逝きたかったのだろうか・・・でも、誰も殺してくれないから、百合の花でその身を包んで逝ってしまったのか・・・)

瞳のただの憶測にすぎない。けれど、愛した女性と同じ名前の花に囲まれて、弟と息子の傍で逝ってしまった木犀は幸せそうに微笑していた。

瞳は一人、庭に座っていた。

その後、桐伙は楓と共に木犀を運びに森に帰った。楓一人に木犀を任せることは優しい彼にはできなかったのである。ただ、帰る間に桐伙は瞳に言ったのだ。必ず戻る、と。

(帰ってくるよね、桐伙・・・)

初めて会ってから一ヶ月弱が経った。だが、瞳にとって桐伙の存在は大きくなっていった。帰りを待ちわびるほどに。

(でも・・・帰ってこないほうがいいのかもしれない・・・)

自分の気持ち、燃え上がるような恋心に、瞳が気づいてしまったから。きつと溢れてしまう。それならば、帰ってこないほうがいいのかもしれないと瞳は思っている。

(こんな心・・・溢れないほうがいい・・・だって、私は人間で、あつちが妖怪なんだもの・・・それに、次の長に選ばれるほどの実力があつて、あんなに綺麗な顔立ちをしていたら・・・ああ、花菜もこんな気持ちだったのかしら・・・恋心ってこんなに醜くも激しいものなのね・・・) 瞳は知ってしまった。恋心が激しくも醜いものであることに。そして、気づかなかつた。こんなにも真っ直ぐで甘美であることに。

## 妖伝説～白銀の狐と人間の恋物語～

は呆然と二人を見ていた。

「願いを……叶えてくだ……さいませ……」

「叶えてやる！だから、しつかりしろ！！」

「で……は……」

ドスッ

「かはっ……ゆ……り……?」

「これで……叶います……梅雨華……さ……」

木犀にも見えていた。百合がいつも護身用に使っていた短刀で梅雨華が刺された瞬間が。そのあとに百合が息を引き取ったことも、梅雨華が短刀を抜いたあとに百合の傍で倒れこんで死ぬところも。

(母上……百合の願いは二人で死ぬことだと言うのか……!?)

愛する者を殺したこと。その愛する者は夫と死の世界に逝こうとしている。その事実が木犀の脳裏を走っていく。

(この俺を置いて逝こうというのか……!!)

木犀はそうはさせるものかと考え、百合を斬りつけた刀を自分の心臓に突き刺そうとした。だが、あるところから飛んできた木の葉が木犀の手を掠めた。

「っ……」

木の葉を掠めたときに傷を負った木犀は刀を落としてしまう。そして、木の葉が飛んできたほうを見ると、長が立っていた。

「……伯父上……」

「これは何としたことだ……何があつたのだ、木犀!!」

木犀は真実を話そうと思つたが、ふと思いとどまった。もし、ここで真実を話せば木犀は百合を殺した罪、百合は夫の梅雨華を殺した罪に問われるだろう。

(罪を背負うのは……俺だけでいい……)

幸い、百合が梅雨華を刺した短刀は抜けている。ならば、それは夫を亡くした悲しみで百合が自殺するために使ったことにすればいい。梅雨華の掌にできた傷は本来、百合が刺した短刀を抜くためにできたものだ。

が、木犀が刺したときに掴んだことにすればいい。二人とも刺し傷だ。何も問題はない。

「……申し上げます。私は父である梅雨華を殺しました。」

「なんだと……!?!」

「母上である百合を愛して、迫りました。楓は私の子供です。母上もそれは知っていたようです。父上が憎くなり、手合せの隙について殺しました。」

木犀の嘘を信じきった長は愕然とした。木犀は嘘がばれていないようであることに安心していた。

「なんとしたことか……梅雨華ほどの者が息子とはいえ、隙をつかれようとは……」

長は家族を愛していた。妻や娘はもちろん、弟も、その家族も愛おしんでいた。失うことを恐れていた。しかし、期待していた甥に弟を殺された。その事実は長の長候補を変えるのに充分すぎる出来事だった。

「木犀、貴様は次期長から外れてもらう。だが、お前は楓の父親。楓が立派になるまで育てる義務がある。桐伙にもこの出来事はありのままに伝え、桐伙を次期長とする。」

「……はい。」

木犀はうなだれて、その言葉に従った。

その出来事を知った桐伙は木犀を「兄上」ではなく「木犀」と名前と呼ぶようになった。憧れと尊敬の対象であった木犀を「兄」ではなく「罪妖」として扱った。楓は成長し、木犀を「親父」、桐伙は名前前で呼ぶが「兄」として扱った。

ついに耐えられなくなった桐伙は森を出た。そして、長は木犀と楓に桐伙を連れ戻すように命じた。そして同時に、木犀は命令を果たせたならば再び一族に迎えられる約束になっていた。

これが真実であった。

「すまない、そのようなつもりで言った訳ではないのだ！ただ、そうなら良いと……婿としてなら、木犀や桐伙が良いと考えただけなのだ。娘にそれを強制させるつもりは毛頭ない。」

「そうでございしましたか……身の程知らずの発言、お許しくださいませ……」

「いやいや、そんなに謝らなくても！百合殿は私の弟の妻……私の妹にもあたる者。家族の発言を身の程知らずと誰が思うものか。」

桐伙はそのやり取りを聞いて、安心していた。最近、百合は元気がなく、無理に笑っているようだったが、長と話して、気が紛れているようだ。

「よかった……このまま、少しでも元気になってくださいば……」

「そういうえは……梅雨華と木犀はどうした？全員で来るものと思っていたのだが……」

「梅雨華様はあとからいらつしやると聞いておりますが……桐伙、何か聞いていない？」

長が弟ともう一人の甥が来ていないことを口に出し、百合もよくわかっておらず、桐伙に何か知らないかと問う。桐伙は、母も知っているものと思っただけらしく、少し驚いた顔をしながら言った。

「えっ？兄上は、父上と手合わせしてから来るとおっしゃっていましたが？てっきり、母上もご存じとばかり……」

「……えっ……」

百合は愕然とした。そして、唐突に立ち上がり、長や桐伙に何も言わずに走り出した。これには長も桐伙も驚いた。

「母上！？」

「百合殿！？と、とにかく……桐伙、楓と共にここで待っていないさい。私が様子を見てこよう。」

長は抱きかかえていた楓を桐伙に託し、念のためにと武器となりえる葉と刀も持って百合のあとを追いかけた。桐伙は穏やかに眠っている楓を眺めながら、心中、不安に駆られていた。

（何事も無ければ良いのだが……）

その少し前、梅雨華と手合せしていた木犀が、ふいに口を開いた。

「少し、父上に相談したいことがあるのですが。」

「相談？私でよければ聞こう。」

手合せを一時中断し、梅雨華は木犀の話聞くために縁側に腰かける。

木犀は父の前に立ち、口を開いた。

「今、私は恋焦がれているのです。」

「ほう、恋焦がれていると？」

今まで恋愛沙汰で噂されたことのない木犀が恋する女がいたと、梅雨華は驚きを隠せなかった。長候補……すでに次期長に確定されているので、いつかは妻を娶らせてやりたいと思っていた梅雨華は嬉しそうに頷いた。

「そうか、お前が恋を……それで、相手は誰なんだ？私ができることなら、協力は惜しまないぞ。」

「そうですか……では……」

「その言葉を聞いた木犀は手合せに使っていた木刀（ぼくとう）を放り投げ、傍らに立てかけてあった、立派になった証にともらった愛用の木刀（もくとう）を握る。

「では……死んでください。」

ドスッ

ドスッ

綺麗な庭の片隅に血の池ができていく。白銀の髪が揺れる。ドサッと倒れた音が聞こえた。

「なん……で……」

「百合……！！」

刺されたのは愛する夫をかばった百合だった。庭に倒れ伏した百合を梅雨華が抱き起こす。

「百合っ！百合っ！しっかりしろ！！」

「あなた……ゴホッ……最期に願いが……」

「最期なんて言うな！私を……生まれたばかりの楓を置いて逝くな！百合！！」

致命傷なのは刺した木犀も刺された百合も理解していた。ただ、木犀

妖狐族の掟で、出産後一日は出産した者である百合の親、兄弟姉妹、夫の梅雨華以外は出産部屋に入ることは許されない。どういう経緯でこのような掟ができたか誰も知らないが、世間上、息子である木犀は明日でないと入れないのである。

(くそっ……俺があの子供の……楓の父親だというのに……！)  
このままいけば、楓は梅雨華を父親と認識し、育っていくだろう。だが、木犀はそれが我慢ならなかった。百合との子供を奪われるような感覚なのだ。

(いつそのこと……殺してしまえば……)

梅雨華を殺せばいい。木犀はそんな結論に辿りついた。梅雨華さえ殺せば、楓は自分を父と認識し、百合も自分に振り向いてくれるだろうと。実際、そんなことをしても、百合と木犀は親子であるため、夫婦になることはできないのだが、木犀はそんな現実から思考をそらし、理想の世界に浸っていた。

「……上、兄上！」

「!?」

耳元で叫ばれ、木犀は驚き、声をかけてきた桐伙を見た。

「桐伙……どうした？」

「どうした、ではありません。先ほどから何か考え込んでいたようですが……何かあったら、俺を頼ってください。何かできることがあれば、協力します。」

微笑む桐伙を見て、木犀はつられて微笑む。少し元気になっただろう兄に安心した桐伙は一礼し、その場を離れた。それを見送ったあと、木犀はふと考えた。

父である梅雨華は憎い。愛する百合の夫だから。だが、同じように育った桐伙はどうだ。

梅雨華が百合に近づき、肩などを抱いたりすれば憎しみで心が埋まる。しかし、桐伙が百合に近づこうと抱きしめられようと、さらには、楓の名前を名づけても心は穏やかで、憎しみなど欠片もないのである。

(やはり兄弟には憎しみは湧かないものなのか……)

しかし、木犀は百合を愛している。多少なりとも桐伙にだって可能性

はあるのだ。

だが、木犀は桐伙に対して憎しみはない。怒りもない。あるのは、兄弟としての愛情。梅雨華を殺すことに何の躊躇はなくとも、桐伙を殺すことは躊躇する。いや、殺すどころか、傷をつけることすら難しいかもしれない。

(不思議なものだな……)

木犀は苦笑し、そして、父親を殺す計画をすすめるのであった。

## 第十二章 あの時 の出来事

楓が生まれて一週間後のことだった。桐伙と百合は楓を連れて、長の屋敷に来ていた。

「おお……この子が三人目の……」

「はい、長。我が弟の楓でございます。」

すやすや眠る赤子を抱いて、長は感動の涙を流す。桐伙は誇らしげに楓を自慢していて、それを見ていた百合は笑顔になる。だが、心の内は暗く、罪悪感で満たされていた。

「百合殿、これは奇跡……よく生んでくださった。」

「勿体ないお言葉を……」

「いやいや。これで次の長が木犀となり、桐伙と楓がいれば、妖狐族は安泰。我が家に男が生まれなかったのだけが、少し残念ではあるが……」  
長の元には一人娘がいるだけで、息子がいない。そのため、次なる長の候補は弟・梅雨華の息子達から選ばれることになった。さらに、木犀は妖狐族でも飛び抜けて強く、長候補として誰も異論しなかった。

「むっ……いつそのこと、娘を木犀に嫁がせるか……」

「……長様、それは御子様がお決めになられることでございます。私が申しては失礼ではございますが、勝手に決めては御子様がお可哀想で……」

ただの思いつきだった長の発言に、百合は伏せ目がちに意見を言う。  
長は百合が異論を言ったことに驚いたものの、慌てて手を振る。

「木犀、離しなさい！離して！」

「百合、まさかお腹の赤子を殺そうとは考えていないだろうな？」

「っ！？」

百合は驚愕の目で木犀を見た。確かに、百合は事故に見せかけて赤子を殺して自分も死んでしまおうと考えた。木犀はそれを見越して百合に忠告をしに来たのだ。

「そんなことをしても、俺が赤子を守る。俺の……大事な子だからな。」

「……うっ……ひっく……」

木犀の言葉に、百合は耐え切れずに涙を流す。

百合も薄々、そんな気がしていたのだ。お腹の子供は梅雨華の子供ではなく、木犀の子供だと。

「父上も桐伏も三人目を楽しみにしている……子供が死ねば、さぞや悲しむだろうな……？」

「ひっく……ひっく……うっ……」

しかし、死ぬことは木犀が許すはずがない。梅雨華も、必死になって守ろうとするだろう。なにより、弟妹を楽しみにしている桐伏の笑顔が脳裏に浮かんで、百合は愚かな考えを諦めざるを得なかった。

「母上。」

廊下から桐伏の声がして、百合は慌てて木犀を押しつける。木犀も、桐伏に見られては、と考え、素直に離れる。

「三人目の子を身ごもっていると父上から……母上！？いかがなさいました！？」

まだ幼さを多少残しつつ、立派に成長している次男は、百合が涙を流しているのを見て驚き、心配そうに近づく。百合は無理やり笑顔を作り、首を横に振った。

「大丈夫よ、桐伏。三人目の子が生まれると思うと気が緩んでしまっ……それに貴方も楽しみにしていたでしょう？」

「はい、弟であれ妹であれ、元気な子が生まれて欲しいものです。母上も、身体を労わってください。」

「ええ、ありがとう、桐伏。」

百合は寝台に座り、桐伏をそっと抱き寄せた。桐伏も少し照れ臭そう

にしつつ、百合が抱き寄せられるのに従い、膝をつく。

「百合、兄上に伝えてきたぞ。ならば、贈り物だ、祝いだと兄上の屋敷は大騒ぎだ！」

長である兄に伝えてきた梅雨華は、百合の部屋に入ると、隠そうともしない幸せな笑みを浮かべていた。

「まあ……まだ生まれていませんのに……それに、この先だって何か間違いがあったら……」

「大丈夫だ、私がいるぞ、百合。それに、長候補の木犀だっている。桐伏だって、お前を守ってくれるぞ。」

「そうですね、母上。我々がいるのですから、何の心配もありません。桐伏も俺には多少劣りますが、一族では群を抜いて強い。母上に害なす者がいれば、我らが母上をお守りいたしましょう。」

「兄上、多少劣るは余計です。」

「大丈夫だぞ、桐伏。お前も充分強いからな！」

父の言葉に引き続いて、木犀が息子らしいことを言って、母を安心させる。次男が長男の言葉にむっとなり、父がそれを見て微笑む。

この風景だけを見れば、仲睦まじい家族の様子である。だが、現実はまだ大きく異なっていたのだった。

それから、しばらくが経ち、百合は第三子の楓を出産した。名前は桐伏が考え、梅雨華と百合と木犀は異論しなかった。

「よしよし、元気な子だな。百合、よくやった。」

「はい、あなた……」

寝台に横たわって休んでいる百合に、梅雨華は楓を腕に抱いて大喜びである。そんな喜びの声は、部屋の外に控えている木犀や桐伏にも聞こえていた。

「……」

微笑ましげに聞いている桐伏に対し、木犀は無表情に、心は怒りで染めながら聞いていた。

(本来ならば、俺があそこに立って、楓を一番に抱くはずだったのに……)

## 第十一章 出来事を語る前に

瞳も楓も生まれていない昔のこと。妖狐の集落にあるものでは大きいと分類される屋敷に長の弟家族は住んでいた。

「お待ちください、母上！」

「いいえ、いいえ。何度も言うけれど、私は貴方の母。貴方は私の子であり、長の候補として期待されている大事な妖狐。私は子として愛を告げられ、男の貴方に愛を告げることはないのよ。」

百合は屋敷を逃げ回りながら、木犀の想いを跳ね除ける。木犀はそれを追いかけるが、想いを告げる。

木犀は、父・梅雨華がいない時を狙って母・百合に自分の想いを告げた。しかし、百合は決してそれを受け入れようとはしない。夫である梅雨華を愛しているからだ。

「では、こちらでも何度も申し上げます。俺は貴方を愛している。もはや、母と見ることはできない！」

「そのようなことを口にしてはなりません、木犀！貴方が私を愛そうとも、私はあの方しか愛せないし、愛さないわ。私の心は梅雨華様のためにあるのよ。」

木犀は、百合の梅雨華への想いを聞いても諦めきれない。それどころか、さらに恋心が募り、梅雨華を憎んでしまいたいそうだと。

「心・・・か。ならば、体は俺がもらうぞ、百合。」

「!？」

木犀は素早く百合に追いつき、その体を抱き上げ、近くの一室に足を進める。百合は一瞬驚いたものの、すぐに抵抗を始める。

「いや！木犀やめなさい！やめて！」

今から木犀が行うことを百合は即座に理解した。梅雨華以外に受け入れたくない行為を防ぐために百合は必死に抵抗し、妖力を使って庭にあった植物も操った。だが、木犀は梅雨華が立派に育て上げた長候補。その力は百合よりも強く、彼女が操っていた植物を、逆に操ってしまった。

木犀は百合を床に寝かせ、操った植物で百合を抑えつけた。

「百合、愛している。だから、受け入れてくれ。愛している。」

「いやあーやめて！誰かあーあなた！桐伙！」

百合は苦し紛れに夫ともう一人の息子を呼ぶ。おそらく彼らがいれば、木犀は諦めただろう。木犀もその二人がいたら、ここまでのことをするつもりはなかった。

「父上と桐伙は長の邸・・・明日の朝に戻る。この邸には俺と百合だけだ。」

木犀はフツと笑いながら、百合の着物の帯を解いていく。

「いやあー！！！！！！！！！」

百合の激しい抵抗も空しく、彼女は木犀に体を許してしまったのだ。

それからは、百合にとつては地獄ともいえる日々だっただろう。梅雨華とそのような行為をしても、木犀が上塗りするように行為を求めてくる。愛する夫と憎んでも憎みきれない息子に板挟みにされ、百合は自分の事が穢れていると思うほどだった。当然、梅雨華にも桐伙にも、弟にも相談できず、独りで泣いたこともある。

そんなある日、百合の体に変化があった。

「あなた・・・子供が・・・」

「本当か、百合!？」

百合が子供を授かったのだ。数が少なくなっていく妖狐で一人の母から三人目の子供が生まれるのは、奇跡ともいえるほどであったのだ。

「それはすごい！奇跡だ！兄上に・・・いや、まずは桐伙に報告してやらねば!!!」

弟妹を欲しがっていた次男に教えてやろうと考えた梅雨華は、嬉しそうに部屋を出て行った。だから、気づかなかったのである。百合が今にも泣きそうな顔であるということ。

「あなた・・・ごめんなさい・・・」

百合は一筋の涙を流し、そう呟いた。声もなく泣いていると、背後から木犀が百合を抱きしめた。

「ひっ！」

百合はひきつった声をあげ、木犀から離れようとするが、木犀は力強く抱きしめているため、逃れることができない。

冷静な木犀に対して、子供っぽい楓は単純であった。実際、木犀からしたら子供なのだが。

「けど、桐伙の気配は実際に無いし、この好機逃したら他に無い！行ってくる！」

「待て、楓！」

楓は木犀が止める間もなく、瞳に向かっていた。木犀は軽く舌打ちをし、息子のあとを追う。瞳も向ってくる気配を感じ取っていた。そう、木犀の予想通りなのだ。

「見えぬ力よ、彼の者を地に縛りたまえ！」

瞳は術を発動し、腕を伸ばしたら届くか届かないかギリギリの距離まで来た楓の足止めをする。

「楓——！」

木犀は予想が的中したことに、さらに舌打ちをして楓を助けるために刀を抜く。

「冷静さを失ったな。背後が空いている。」

「!?!」

背後から聞こえた桐伙の声で、木犀は今まで冷静でなかったことに気づく。息子を助けた一心だったということに。そのために、木犀は呆気なく桐伙が操る植物に捕らわれた。

「徒人見えぬ壁よ、私の前に姿を成せ。」

瞳は新たに術を発動し、全員を囲む立方体の結界を創りだす。これで、結界内を見ることが出来るのはよっぽどの霊力を持った者か妖怪だけだ。

「……我らを捕らえてどうするつもりだ、桐伙。俺はともかく、楓を殺すほどの心は持ち合わせていないだろう。」

「貴方を殺す心も持ち合わせていません、兄上。」

木犀と楓は目を見開き、桐伙を見た。二人が驚いたのは、桐伙が木犀を兄上と呼んだこと。だが、驚いた意味が異なっていた。

「親父が……桐伙の兄……?」

今まで桐伙の父親も木犀と疑わなかった楓は茫然とした。瞳は楓が真実を知らないことに驚いた。

(まさか知らなかったとは……)

瞳はてっきり、楓は木犀の罪を知っているものと思っていた。三人が共に、同じ母から生まれたことも。

楓が混乱する頭の中で必死に物事を整理している間に、桐伙と木犀は話し続けていた。

「……再び、お前に兄上と呼ばれると思っていなかったぞ、桐伙。」

「兄上が罪を犯した時は、軽蔑した眼差しで貴方を見ていましたから。再びそう呼んだのは、兄上に聞きたいことがあったからです。」

「俺に聞きたいことだと?」

木犀は不思議がり、首を傾げる。楓は、桐伙に兄上と呼ばれて否定しない父親を見て驚き、助けを求めるような目をした。

「何で……桐伙は親父の子で、俺の兄じゃないのかよ……どうなって……」

瞳は混乱する楓にさりげなく近づき、事の成り行きを見守っていた。作戦の中で瞳の役割は、一人しかいないであろうと考えて突っ込んできた楓を足止めし、木犀の冷静さを奪い、二人が捕らわれたところで一般人に見られないように結界を張ることだ。この先は、桐伙と木犀、楓の問題であり、瞳の出る幕ではない。

「兄上は実の母を愛した。そして、強引に迫って、楓を産ませた。さらには恋敵の父を殺した。だが、これらは全て終わった後から長から聞いただけ……だからこそ、改めて聞きたい。あの時に、何があったのか。貴方より強いはずの父が何故、息子が相手だったとはいえ、殺される程の致命傷を与えられてしまったのか。」

桐伙が知っているのは、木犀から聞いた長が語った事だけ。もしかしたら桐伙に気遣い、語っていない事や嘘を言った事があるかもしれない。

桐伙が知りたいのは、真実だ。

「……」

「兄上、お答えいただけませんか?」

俯き、沈黙している木犀に桐伙が再び問うた。そして、ついに、木犀は口を開いた。

「全てを話そう。あの時に何があったのか。」

「全てを話そう。あの時に何があったのか。」

は口を開いた。

「全てを話そう。あの時に何があったのか。」

「別に長が嫌だという訳ではないんだが……まず、木犀や楓を嫌悪する心を抑えるために森から離れたかった。楓が木犀を『親父』と呼ぶ度に憎悪してしまつたからな。楓だつて母上の子供で俺の弟だから、兄弟でありたかつたんだ。あと……探していた人がいる。」

「探していた人？」

「ああ。俺を助けてくれた人間だ。」

桐伏は微笑し、その頃を思い出し出していた。桐伏のそんな表情を見て、瞳は嬉しいような悲しいやら、複雑な心境であつた。

（桐伏でも、こんな幸せそうな笑顔するのね……あんまり見たことないから、ちよつとラッキーだつたかも……）

いつもの桐伏は人からかうような笑顔が多いのだが、今は想い人のことを考えているような幸せそうな笑顔であつた。

（けれど……悲しいのは何故？）

桐伏に対して、瞳は常になんとも言えない感情を持つていた。

会えば男性恐怖症のせいか少し緊張して心拍数があがる。触れられたら、触られた場所がほんのり温かくなつたような気がしたりする。笑顔を見れば顔が少し熱くなり、心拍数があがつて熱でもでるのではないかと思うくらいだつた。

（変な私……病気なのかしら……）

瞳は今まで持たなかつたこの不思議な感情を病気と思わずにはいられなかつた。

そんな風に考え事していると、桐伏が心配そうに顔を覗き込んできた。

「大丈夫か？ さつきから、何か考えているようだが……」

「っ……いや、なんでもない。」

瞳はすぐ顔をそらし、顔の熱を下げる努力をした。桐伏は首を傾げて、その様子を見守るのだった。

（ほら、また……顔が熱くなつている……）

瞳はどうか熱を引かせ、改めて桐伏を見る。先程の笑顔はなく、様子のおかしい瞳を心配しているような顔であつた。

「とにかく……話を聞いている限りでは、木犀は一族に認められた

いから名誉挽回の意味で桐伏を長にしたがつていふことなのよね？」

「ああ、そうだ。長からの命令で俺を森に連れ戻せば、再び一族に迎えられることになつていふはずだろう。」

話を簡潔にまとめた瞳に、桐伏が頷く。

「木犀は俺を連れ戻すならば、手段を選ばない。そういう性格だ。きつと、お前にも何か仕掛けてくる。その前に、話し合いで決着をつけたい。俺も正直なところを言うならば兄と争うのは御免だ。」

「話し合いで解決できるの？」

「策は考えてあるが、それを実行できるかどうかだな……」

二人は考えた末、ある作戦を立て、木犀と楓が現れた時に行動によつて作戦を執行するという賭けにも似た行動にでた。

## 第十章 作戦決行

人間的に言えば、今日は土曜日。しかし、妖怪である木犀や楓には関係のないことだ。平日であろうと、瞳を消そうと目論むが、常に桐伏の気配を感じ、失敗に終わる。

木犀と桐伏はさほど歳の変わらぬ兄弟であり、同じように刀の腕を磨き、妖力もほとんど互角である。従つて、桐伏相手に二人でかかれ勝てるかもしれないが、瞳と一緒にいられては困るのだ。瞳自身も陰陽術を身に付けていて、その力は楓とほぼ互角だと木犀は考えている。

二対二ならば、ほぼ互角。何か隙があれば勝てるかもしれないが、桐伏がそんな隙を見せるはずもない。

（ならば……これは罠と見るべきなのだろう……）

今日、常に感じていた桐伏の気配がまったく無い。確認できるのは何処かへ歩いている瞳だけだ。

「親父、あれは好機だろ。行かないと桐伏と合流しちまう。」

「落ち着け、楓。あれは罠と見るべきだ。あの隙を見せない桐伏がこんな失敗をするはずがない。」

る。桐伏は先程と同じような申し訳なさそうな顔で頭をあげる。

「巻き込んでしまった以上、お前は当事者だ。ならば、説明しておいた方がいいな。」

「何を……?」

「木犀と俺、楓の関係……そして、妖狐族の過去だ。」

瞳は驚愕した。多少の違和感があったものの、ただの親子と思っていたが、何か深い事情があるようだ。

「……妖狐族の長である俺の伯父には息子がいない。そこで、長の弟である、俺の父・梅雨華の息子達から次の長を選ぶことになった。長は男がなるのが習わしだからな。その長候補になったのが、木犀……俺の兄だ。」

「えっ、ちょっと待って……楓の父親で、貴方の兄……?」

楓と桐伏は兄弟。楓と木犀は親子。木犀と桐伏は兄弟。頭の良い瞳でも混乱した。

「木犀と俺の父親は梅雨華……楓の父親は、木犀で間違いない。そして、俺と楓が兄弟なのも、間違っていない。俺達三人は、同じ母から産まれているからだ。」

「同じ母親って……」

瞳はその瞬間に、ある事実に辿り着く。

「ああ……木犀は母・百合を愛し、そして、その間に産まれたのが……楓だ。」

「それって……妖狐族ではどうなの?」

人間と妖怪では違うのかと考えた瞳が問う。しかし、答えは違った。「血のつながりが無い親子ならともかく、実の親子での恋愛関係は罪に値する。しかし、母上は木犀を愛していなかった。木犀が一方的に恋心を抱いて、母上に迫り、楓を産ませた。恋愛関係ではない、という点で木犀は罪に問われず、一族の中で生きてこられた。」

その母親・百合も生きてはいないため、事実を確認しようがないというのが一族の本音だろう。桐伏はそう考えているらしい。

そこまでの説明を聞いた瞳が、確認のために整理し始める。

「えっと……木犀さんと桐伏の両親は、梅雨華さんと百合さん……」

楓の両親は、木犀と一方的に迫られた百合さん……そして、木犀は百合さんを愛していたけれど、百合さんが好意を抱いていないから罪にならず、長の命令で桐伏を連れ戻そうとしている……でも、どうして桐伏が戻る必要があるの?木犀は長候補だったんでしょ?」

「確かに長候補だったし、母上の件で罪に問われなかった。だが、木犀は別の罪があった。」

「別の罪?」

「父・梅雨華殺しの罪だ。」

瞳は自分の顔が蒼くなっていくのを感じた。

何のために、どんな理由があって、血の繋がった父親を殺したのか。瞳にはまったく理解ができなかった。

「幸い、父上は楓が木犀の子供だと気づくことはなく、三人目の子供だと可愛がっていた。一人の妖狐から子供が三人以上も産まれることは奇跡と呼ばれるほど珍しいことだったからな。だが、父上が楓の父になることを木犀は許さなかった。」

「まさか……楓に自分こそが父親だと認識させるために……木犀は自分の父親を殺したの……?」

「ああ、そうだ。楓はまだ幼かったし、物心つく前に……と。」

瞳は行き着いた結論を、口にした。桐伏はそれを聞き、重々しく、頷いた。

「そもそも、母上を愛していた木犀にとって、父上は恋敵ともいえる存在だった。それに、先程言ったことも重なって、父上を殺した。殺したところで、母上は木犀に恋心を抱くはずもないし、一族の掟で妻にすることもできなかったのにな……」

木犀は、自分を騙していたのだろう。父を殺せば、愛しい母が自分に振り向いてくれる。そんな子供じみた思い込みをしていたのだ。

「ただ、木犀は母上に見て欲しかっただけなんだろうな……けれど、それは罪に値し、木犀は長候補から外され、次男の俺が長候補になった。」

「桐伏はどうして長にならないの?」

木犀が長にならない理由を聞いた後、瞳はそんな質問を試してみた。桐伏はしばらく思索してから答えてくれた。

「・・・言いたいことは、それだけか。」  
「っー！」

冷酷に瞳を見下す父親は、木から削ったと思われる刀を鞘から抜き、瞳の首元にあてた。本来ならば木刀と呼ばれるそれは、鋭く、真剣と相違なかった。

瞳は生まれて初めて、死の恐怖を感じていた。恐怖からか、目を堅く閉じていた。

「死ぬ。」

キンツ

刀と刀が、交わる音がした。目を閉じていた瞳には何が起きたのか、わからなかった。

背中を踏んでいる足の感触がまだある。だが、誰かが自分を庇うように立っている気配がした。瞳はそっと目を開け、目の前に広がる光景を見て、全てを理解した。

「桐伏・・・」

桐伏が助けにきてくれたのだ。父親と同じような刀を持って。

「さがれ、木犀（もくせい）。斬るぞ。」

「・・・」

桐伏の殺気を感じたのか、妖狐・木犀は瞳達から離れ、刀を鞘にしまう。

「木犀、長がここまでの命令をしたのか？ したと言うならば、なおさら、俺は森には帰らない。このような命令をする長の元になんぞ、居たくないからな。」

「・・・これは、独断だ。その人間が居なくなれば、お前はここにいる理由を失くす。」

「ここにいるのは俺の意思だと言っている。」

桐伏と木犀の睨み合いが続く。楓は木犀の一步後ろで、瞳は桐伏の背後で腕を使い上体を起こしながら、その様子を見守っている。

「・・・今日のところは帰る。だが、諦めたわけではない。覚えておけ。」  
木犀はそう言うと、姿を消した。楓もそれに習って、同じように姿を

消した。桐伏は刀を鞘にしまい、瞳の傍に来る。

「大丈夫か。」

「ちよっと背中が痛いぐらい・・・」

背中をさすりながら起きる瞳を、桐伏は申し訳なさそうな顔で支える。どうにか瞳は立ち上がるが、死の恐怖が残っているのか、膝がガクガクを震えるため歩くことがままならない。

「じっとしている。」

その様子を見かねた桐伏が瞳の肩と膝裏に手を入れ、抱き上げる。いわゆる、お姫様抱っこだ。

「きゃあーちよっと・・・！」

「跳ぶから、動くな。前にもしているから、今更だろう。」

前とは、花菜の事件の時に黒い触手から助けられたときのことだろう。しかし、あの時とは違い、今回は緊急事態ではないため冷静なのだ。  
(近い近い近い！)

間近にある桐伏の顔に、瞳の心拍数は早まっていた。そして、ふと冷静になって考えてみる。

(・・・嫌悪じゃなくて、羞恥心?)

男性恐怖症の瞳は、男性が近づくだけで嫌悪するし、恐怖で怯える。だが、桐伏に対しては違う。嫌悪ではなく、恐怖でもなく、羞恥心のほうが勝っている。自分自身の心の変化に瞳は首を傾げた。

## 第九章 妖狐族の過去

「着いたぞ。」

「ありがとう・・・」

着いたのは、瞳の家の庭だった。庭にある椅子に瞳を腰かけさせ、桐伏は椅子の傍らに立ち、頭をさげた。

「・・・すまない、妖狐族の争いに巻き込んだ。」

「えっ、いや、巻き込まれたものは仕方ないし・・・」

瞳は謝罪する桐伏に、首や手を振って、気にしていないことを主張す

づき、慌てて笑う。

「大丈夫よ。心配しないで。」

「でも、小田くんや山中くんにも心配されてたよ？ ホントに大丈夫？」

そう言われると、瞳も大丈夫とは言い切れなかった。

確かにため息をつく度に一樹や優も心配の言葉をかけていた。その度に瞳は作り笑顔で大丈夫と言って誤魔化したのが、一樹にはすぐに作り笑顔がバレて、問い詰められていた。頭をフル回転させて誤魔化した。(言えるはずもない……まさか、桐伙に会えないから寂しいなんて……)

花菜に問い詰められても、言えるはずがない。友人達を、妖怪と……非日常的な生き物と関わらせては大変なことになると瞳はわかっていた。

「無理しないでね？ 何かあったら、相談してね？」

花菜は瞳にそう強く念を押して、帰宅した。瞳は花菜に手を振って見送り、姿が見えなくなると、再びため息をついた。

「何で……寂しいんだろう……」

瞳自身、何故寂しいのか、わからずにいた。会えなくて、寂しいのはわかっている。けれど、何か特別な関係というわけではない。会えなくて寂しくなるほど一緒に居たわけでもない。

「たった二週間しか一緒にいなかったのに、同じように二週間会えないぐらいで、どうして寂しくなるのよ。」

誰に聞かせるわけでもなく、瞳はそう言った。しかし、それに返事をした者がいた。

「そんなの知るかよ。」

「!？」

瞳は声の主を探すために、辺りを見回す。声の主は公園の木の上で寝転がっている楓だった。

「貴方は楓……」

『あいつは、俺を森に戻すために様々なことを仕掛けてくるだろう。今後、楓が接触してくるかもしれない。だが、関わるな。』

楓の姿を確認すると、瞳は桐伙に言われたことを思い出し、すぐに走り出す。楓から逃れるために。

「逃がさん。」

「ぐっ!」

だが、逃げることはできなかった。目の前に突然、桐伙や楓とは別の妖狐が現れ、瞳の腹に拳をいれた。

瞳はうめき声をあげ、地面に倒れ伏し、咳込んだ。現れた妖狐は瞳の傍らに立ち、見下す。

「親父!？」

楓はその妖狐の姿を見て、驚いて傍に走ってくる。親父と呼ばれた妖狐は瞳から視線を外し、楓を見る。

「桐伙はいないのか。」

「こいつと別行動みたいだ。妖気も感じられねえ。」

「そのようだな。」

二人が会話している間に、瞳は楓の横に立つ妖狐を、倒れ伏したまま観察した。

(親子……確かに、目の色とか髪の毛の質が似てる……けど、桐伙の父親にしては、似てない……)

瞳の中で、この親子に何か違和感が残った。しかし、今はそれを考えられる状態ではなかった。

「ならば、こいつは始末したほうが良さそうだな。」

瞳を冷酷に見下しながら、父親はそう言った。瞳は慌てて立ち上がるうとするが、足で背中を踏まれ、再び地に伏せた。

「親父、殺すのか……?」

「桐伙を森に戻すため、長にするため……仕方ないだろう。」

「……っ……何で、桐伙が……」

楓はふと、瞳の呟きを聞き取り、耳を傾ける。父親も、少し話すぐらいならばと待っているようだ。

「どうして……貴方がいるのに……桐伙が長になる必要があるの……?」

父親が現れた時、容姿と同じく瞳は疑問に思ったことがある。

桐伙の父親がいるならば、何故、父親である彼が長にならないのか。

桐伙の上を行くと思われるのに、何故、桐伙を長にしたがるのか。

長に興味がないのか。

クツと震え、喋ることを止める。

瞳は一字一句、聞き逃さなかったので、桐伙のセリフから、彼らが兄弟だと判明した。

「俺がここに居るのは、俺の意思だ。例えば、長が自ら来たとしても俺は森に戻ることはない。そう伝えておけ。」

「……」

(桐伙……?)

口調は先程と同じぐらいに鋭かった。瞳が怯えるくらいに。

表情は冷淡なようでいて、何処か優しく、そして悲しげだった。瞳が悲しくなるくらいに。

「行くぞ。」

「えっ、でも……」

桐伙は、楓を気にしている瞳を見て、腕を掴んで歩き出す。瞳は掴まれたまま、一緒になって歩き出す。俯いている楓の横をすり抜けたとき、瞳はある事に気づいた。

(何か……呟いてる……?)

微妙な音量とそよいでいる風で聞き取れそうで聞き取れないが、楓が何か呟いているのを瞳は確かに見た。桐伙は楓を見ていなかったから、気づかなかったようだ。

二人の気配が消えた時、楓はようやく聞く音量で言った。

「絶対に、森に戻してやる……それが、望みなんだからな……」

「……」

桐伙は瞳の腕を掴んだまま、黙って歩いていた。瞳は桐伙に腕を掴まれたまま、考え込みながら歩いていた。

(さっきの楓は何を呟いていたのかしら……それに、桐伙が止める前に何を言いかけていたのかしら……少なくとも、桐伙にとって不利なことや私に知られてはならない、重要なこと……!?)

瞳は、桐伙が急停止したことに驚き、思考と歩いている動作を停止さ

せた。桐伙の背中から、考えはわからない。何かを瞳に伝えようとしているのは、わかるのだが。

「桐伙?」

「……あいつは、俺を森に戻すために様々なことを仕掛けてくるだろう。今後、楓が接触してくるかもしれない。だが、関わるな。見回りも止めておけ。いいな?」

「………わかった。」

色々と指示をされ、瞳は何か反論しようかと考えたが、諦めて、頷いた。今の桐伙には逆らっては駄目だと、頭の何処かで理解しているからだ。

「……その代わり……ではないが、約束しよう。」

「約束?」

桐伙は瞳に向き直り、再び口を開く。その時の表情は先程とは違い、優しい、だが真剣な顔だった。

「俺は、絶対にお前を裏切らない。お前を信じる。この先、どんなことがあるうとな。」

「えっ……」

こんなことをハッキリと瞳に言うのは桐伙ぐらいではないかと思う。瞳は、真剣な顔つきの桐伙に見惚れていた。

桐伙はそれだけ言うと、屋根に跳んで、姿を消した。照れ隠しだろうか。

(……何なのよ……かっこいいじゃない……)

瞳は少し頬を紅くして、そんなことを考えた。

## 第八章 疑惑

「はあ……」

瞳は桐伙の忠告通りに見回りをせずに過ごしていた。それは、桐伙と会うことがないという意味だ。

そして、そんな生活から早二週間が経過していた。

「瞳ちゃん、大丈夫?」

一緒に帰っていた花菜がため息をついた瞳を心配する。瞳はそれに気

た瞳は、この調子で男性恐怖症を克服しようと努力していた。

「何かいい方法はないかしら……」

昼食時に瞳がそう呟き、一樹と花菜と優は一緒になって考えてくれる。こんな友人達がいて、瞳もありがたいたと常々思う。

「難しいよね……小田くんは元から大丈夫だし……」

「山中も平気になったし……いい方法あるかあ?」

花菜と一樹が頭を抱えていると、優がふと思いついたことを口にした。  
「夕立さん、他に平気になれそうな男子っていないの?」

「……その流れで俺に頼むのは、おかしくないか?」

桐伙と出会って早二週間。花菜の事件以来一緒に見回りをしていて、平気なはずの桐伙に男性恐怖症克服の協力を頼んだ瞳は早速問われて、首を傾げる。

「おかしいかしら……?」

「おかしいだろう。俺とは話すことができているから、意味がない。」

桐伙は嘆息しながら、歩き始める。瞳はその後を追いかけながら、口を開く。

「私としては、おかしくないわ。山中君とは、話すのも傍にいるのも触れるのも平気だけれど、貴方だと平気じゃないもの。」

「はっ……?」

今の桐伙の顔はさぞや間抜けであっただろうが、瞳はそれを気にすることなく話し続ける。

「貴方が触れてきたときは、緊張で心拍が早くなるし、何ともいえない感覚に陥ってるし、全く平気じゃないわ。」

「……はあ……」

桐伙はため息をつき、そして、諦めた。瞳の何とも言えない感覚の正体も知っているが、教える気はないようだ。こうなったら瞳が満足するまで付き合っても問題ないだろうと考えたのだ。

「仕方ない……平気になるまでだぞ。」

「ありがとう、桐伙。」

瞳はニコニコ笑って、桐伙にお礼を言った。桐伙の方はため息をついているが、仕方ないと言わんばかりの微笑であった。

しかし、そんな和やかなムードはすぐに崩れた。

「よお、桐伙。」

音もなく、目の前に現れたのは白銀の髪に狐の耳と尾を持った者……妖狐の男だ。桐伙のことを知っている様子である。瞳は男が相手ということ、桐伙の後ろに身を隠す。

それでは、克服できそうなものも、できないと思うが。

「楓(かえで)……」

桐伙は多少驚いた様子で妖狐の男・楓の名前を呟くが、すぐに無表情になる。瞳は二人を交互に見て、首を傾げる。

(兄弟?そのわりに似ていないのは、それぞれが別の親に似たのかしら……)  
桐伙の目は水色で、髪は少々クセがある少し長い髪。楓の目は青色で、髪は、クセもあるが、どちらかと言えばストレートに近い短い髪。兄弟だとしたら、似ていない兄弟である。

そんな瞳の考えはよそに、桐伙と楓の会話は進んでいた。

「森に帰って来いよ、桐伙。お前ほど長に相応しい奴はいないって、皆言ってるぜ?」

「皆、ではないだろう。それに、俺は帰らない。帰る必要性も理由もない。」  
頼むように言う楓に対して、桐伙はあくまでも冷淡に返す。瞳は対照的な二人を見守っていた。

「桐伙、長の命令に逆らうのか?」

「長がお前まで動かして俺を長にしたいならば、俺はそれに逆らおう。俺は長になる気はないし、森にも帰る気はない。」

「そこにいる、人間のせいかな?」

会話の矛先が突然、自分になったことに瞳は驚いた。楓は無表情に、何処か馬鹿にしたように瞳を見る。

「こんな人間のために、何をするつもりだ?どうせ、人間と妖怪では相容れることはないだろ。それとも、桐伙、まさかこの人間に……」

「楓、それ以上は弟のお前でも容赦しないぞ。」

楓の言葉を遮り、桐伙は鋭い口調で妖気を発しながら言った。楓はビ

だ。瞳はそのことにホッとした。

優しい花菜のことだ。覚えていれば、気にしていただろう。

「瞳ちゃん、あのね・・・聞きたいことがあるんだけど・・・」

「何?」

「小田くんのこと好きなの?」

真面目な顔で、しかし顔を真っ赤にさせながら花菜は瞳に叫ぶように聞いた。瞳は何となく予想していた質問なので、すぐに答えを出した。

「幼馴染としては好きよ。でも、恋愛対象じゃない。」

「ホントに・・・?」

「うん。多分、一樹もそう。私の男性恐怖症を気にしてくれてるだけだと思う。」

瞳が誘拐されたとき・・・男性恐怖症の原因となった事件があったとき、一樹は瞳と一緒に遊んでいたのだ。一樹がお手洗いに行ったときに、あの事件があった。そのために、一樹は責任を感じている。自分が居れば、瞳は無事だったのではないかと。

いつも傍に居るのは、他の男子が不用意に近づいても対処できるように。傍を離れても見ていてくれるのは、大事な幼馴染がまた怖い目に遭わないか心配だから。

(もう、責任を感じる必要なんてないのに・・・)

あの場に一樹がいても、5歳の子供に何かできたわけではない。一緒に誘拐されるがオチだ。

瞳は何度か、一樹にそう言った。だが、一樹はわかったと言っても、瞳を心配し、見守ることを止めなかった。

「そっか・・・よかった。瞳ちゃんが相手だったら、全然敵わないから心配しなかった。」

「心配することないわよ。花菜は可愛いし、すぐに一樹も貴方の魅力に気づいてくれるよ。」

「そ、そんなことないよぉ〜!」

瞳としては本音だったのだが、花菜はすごく照れて、ワタワタとします。瞳はそれを見て、笑った。

花菜の見舞いの帰宅途中、瞳はふと思いついた。そういえば、優にお礼のメールを送っていないのだ。

「送っておかないと・・・」

「背後を取られるなど、言わなかったか?」

「!?!?!?」

背後から声をかけられ、瞳は慌てて振り返る。人目のないところはいえ、桐伏は堂々と立っていた。

「き、桐伏さん・・・」

「呼び捨てでいい。桜井花菜とは和解したのか?」

それを聞かれて、瞳は気づく。よく考えると、花菜のことは桐伏がいなければ瞳も無事ではなかった。

「うん、花菜とは仲直りした。それと、桐伏・・・ありがとう、助けてくれて。何かお礼でもできればいいんだけど・・・」

「別に、たいしたことはしてない。ああ、礼の代わりといってはあれだが・・・」

桐伏が何か思いついたらしい。瞳はお礼になるならばと、次の言葉を待った。

「次の見回りから、俺も連れて行け。」

「えっ?でも、それって桐伏にとつて損なことじゃ・・・」

「じゃあな。」

「ちよっと!」

似たようなやりとりを、一昨日の夜にもしたような気がする。瞳はそう思い、屋根を跳んでしまった桐伏の後ろ姿を見て、ため息をついた。

「もう少し私の話を聞いてくれてもいいじゃない・・・」

瞳は再度、ため息をついて帰宅した。

## 第七章 兄弟

優と出会って、早二週間。ようやく普通に話すことができるようになった

印を結ぶというものだ。

「私は確かに陰陽師じゃない。真似事をしてるだけ。それに、理由だつて自己防衛のため。誰かのために使うなんて、考えたこともない。だけど、それが友達・・・花菜のためなら構わない!」

キッと黒い塊を見据えて、瞳は我流で身に付けた術を發動した。「徒人に纏わりつく悪霊よ、害なす悪霊よ、霧散せよ!悪霊退散!」

グワァー!?!ク、苦シイ・・・!!貴様ア・・・!!

予想外の靈力に黒い塊はのたうちまわっていた。黒い塊は最後の力を振り絞り、瞳に襲い掛かるが、桐伙の植物がそれを許さなかった。鳶を伸ばし、瞳を守るようにして黒い触手を払う。

「往生際の悪い奴だな。さっさと消え去れ。」

ギャアーーーーー!!!

断末魔を叫びながら、黒い塊は消え去り、倒れそうになった花菜を桐伙が支えた。瞳は花菜の傍に駆け寄り、顔色を窺う。

「花菜は!?!」

「息も正常だ。眠っているだけだから、落ち着け。」

「よかったあ・・・」

瞳は安心して、へたりと座り込む。桐伙は花菜を公園のベンチに寝かせ、瞳を労う。

「よくやったな。」

「どうなるかと思った・・・そういえば、どうして私にあんな忠告を・・・?」桐伙と関係はないと思っっている瞳にとっては、不思議でならないことだった。しかし、桐伙はフツと微笑し、瞳の頭を撫でる。

「さあな。その答えは想像にまかせろ。ほら、帰るぞ。」

桐伙はひとしきり瞳の頭を撫でると、花菜を肩に担ぎ、歩き出す。瞳は納得がいかず、再び問う。

「教えてくれてもいいでしょ?どうしてあんな忠告をして私を危険から

遠ざけてくれよう・・・」

「じゃあ、俺の問いに答えたら教えてやる。お前、男性恐怖症は治ったのか?」

「へっ・・・?」

瞳にしては珍しく、間抜けな声だった。今の瞳は当たり前のように、平気で桐伙の横を、手を伸ばせば届く距離のところを歩いている。今までの瞳ならば、考えられないことだった。

「えっと・・・それは・・・」

瞳自身も治ったのかわからないようで、答えが口から出ない。桐伙はその様子を見てフツと笑う。

「その答えが聞けたら教えてやる。ほら、行くぞ。」

「ちょ、ちょっと待ってよ!」

桐伙に弄ばれていた瞳は、慌てて桐伙のあとを追った。

## 第六章 仲直り

次の日、学校は土曜日で休みのため、瞳は昨日のこともあって花菜の家を訪れた。花菜の母親は瞳の来訪を喜び、すぐに部屋に通した。何でも、花菜が体調を崩して寝ているという。

「あ、瞳ちゃん・・・」

「花菜、大丈夫?昨日も体調悪かったみたいだし。」

花菜の顔色が変わるのを確認したが、瞳は見ないフリをして心配の言葉をかける。

「・・・うん、大丈夫・・・あの、瞳ちゃん・・・」

「ん?」

「昨日・・・ごめんね、その・・・避けたり・・・して・・・」

花菜自身も気にしていたらしく、瞳に謝罪する。瞳は首を横に振った。

「大丈夫。ちょっと気にしたけど、花菜にも色々あったんでしょ?」

「うん、ごめんね・・・」

どうやら、この様子だと昨夜の公園であった出来事の記憶は無いよう

「あのような妖怪は存在しない。あれは心の闇だ。」

「心の闇……?」

花菜の心にあつた闇。それが具現化し、黒い塊となっている。瞳の理解は正しかったらしく、桐伙は続けて説明する。

「あの人間の少女……桜井花菜は、お前の幼馴染の小田一樹を恋い慕っていた。しかし、小田一樹が別の人間……つまり、お前に好意を抱いているという勘違いをした。」

「花菜が一樹を……」

一樹にとつて瞳は幼馴染で、いつも近くにいた少女。花菜にとつては、嫉妬しても仕方ない存在だった。

「でも、昨日は避けるなんてことしなかったのに……!」

「昨日、お前と別れてから何処からか噂でも耳にしたんだろう。避けることもしなくて当然だ。それに今まで、小田一樹がお前に好意を抱いているという可能性を、桜井花菜は気づいていなかった。」

そして、別の誰かが言った噂を聞いたのだろう。『小田一樹は夕立瞳に好意を抱いている』と。そして、花菜に嫉妬という闇が生まれた。

瞳はそれを聞いて、友人の心に気づけなかったことにショックを感じていた。

「そんな……花菜は、どうなるの!? あのままだったら大変なことに……!」

「確かに、あの黒い塊をそのままにはしておけん。だから、お前がやるしかない。あの黒い塊を祓うしかない。」

「私が……?」

花菜は助きたい。だが、今まであんな大きなものを祓ったことのない瞳は困惑した。

（もしも、失敗したら……花菜はどうなるの……だって、あんなの……祓えるの……?）

失敗する恐怖、友人を失うかもしれない恐怖、未知なるものと闘う恐怖。様々な恐怖が瞳に襲い掛かる。

「……大丈夫だ。安心しろ。」

恐怖で潰れそうになる瞳の頭を、桐伙がそつと撫でる。瞳は驚いて桐伙を見ると、優しく微笑んでいた。

「お前なら、できる。」

「でも……」

「信じろ。何かあったら、助けてやる。」

「……わかった。」

瞳は決意し、花菜と……黒い塊と対峙する。桐伙は一歩さがり、見守る。

「花菜……私が嫌い?」

「……」

「私が……憎い?」

「……」

二つの問いかけに花菜は返事をしなかった。答えたのは、黒い塊であった。

憎イニ決マツテイルダロウ! 貴様ナンゾ、コノ世カラ……!

「貴方には聞いてない! 私は花菜に聞いてるのよ……!」

黒い塊の言葉を遮り、瞳は改めて、花菜に質問した。

「花菜……私は、どうすればいい?」

「……!」

花菜がこのとき、初めて反応した。瞳は微笑み、再び問いかけた。

「どうすればいい?」

「瞳……ちゃん……」

「ん?」

「……たすけて……」

「わかった、助ける。」

涙を流しながら、花菜はハッキリと言った。黒い塊から、助けて欲しいと。そして、瞳はそれに答えた。

貴様二何ガデキル!? 陰陽師デモナイ貴様二……!

黒い塊が何かを叫ぶ。しかし、瞳はそれを無視して右手の人差し指と中指を立て、残りの指は拳を作るように握る。陰陽師のところという、

「お腹が空いたら自分で作りますから。ありがとうございませす、静さん。」  
 氣遣ってくれる静に瞳は礼を言う。静はニコッと笑い、瞳の部屋を出て行った。

瞳は静を見送ってから、優にお礼のメールを送ろうとケータイを出す。すると、花菜からメールが来ており、瞳は驚いた。

「花菜から!?メールの内容は・・・」

『今日の夜八時半に一人で公園に来て。話したいことがあるの。』

「話したいことって・・・やっぱり、何か気に障ることもしたのかしら・・・」

色々悩んで、ふと、桐伏の忠告を思い出した。見回るな、と。つまり、夜に外に出るなどということだ。

しかし、瞳にとっては大切な存在である花菜からの頼み。まったく面識のない桐伏の忠告より大事なことだ。

「忠告を無視してしまうことになる・・・けど、花菜の頼みだし・・・」

瞳は忠告を無視し、花菜の頼みを聞くことを選び、身支度を整えて、こっそりと家を抜け出した。

## 第五章 嫉妬

瞳が公園に着いたときには、花菜はすでに来ており、瞳を見つめていた。いや、睨みつけていた。

「花菜、話して・・・」

「瞳ちゃんはズルイ!」

何?と聞こうとした瞳を遮り、花菜が突然そう叫ぶ。瞳はビククリして喋ることを止めた。

「いつも小田くんと一緒に!小田くんも瞳ちゃんが心配で!いつも、いつも視線を独り占めして!」

「花菜・・・?」

「何で瞳ちゃんだけなの!?私だって見て欲しいのに!!私は小田くんのこと、こんなに好きなのに!!」

瞳は花菜を宥めようとするが、彼女は口を止めない。瞳はどうしようかと思ったが、ハッと気づく。

花菜の周りにいる、黒い、邪な存在に。

「好きなノに!!どうして振り向いてくれナイの!?私が見つめても、いつも瞳ちゃんバカリ!!」

イイズ・・・モットダ・・・モット心ヲ醜イ嫉妬デ埋メ尽クセ・・・

邪なものが、喋っているのを聞いて、瞳が後ずさった。

小さい、微弱な悪霊や邪鬼には会ったことがある。だが、こんな巨大な闇に、瞳は会ったことがない。

「瞳ちゃんさえ・・・イナケレバ・・・!!」

黒い触手が、瞳に伸びていく。瞳が気づいたのは、それが目の前にきたときだった。

「えっ・・・?」

ドスツ

痛みはない。血も出てない。代わりにあつたのは、宙に浮いている感覚だった。

「だから見回ると言っただろう!」

すぐ傍から聞こえる怒号で、瞳は抱きかかえられていると知った。忠告してくれた桐伏に。瞳を狙っていた触手は瞳が立っていたであろう地面に突き刺さっていた。

「あの時の妖狐・・・」

「桐伏だ。まったく・・・無茶をするな。」

桐伏はため息をつきながら、地面に降り立ち、瞳をそっとおろす。瞳は礼を言うのも忘れて、花菜に纏わりつく闇を見た。

「あれは・・・何?妖怪なの・・・?」

「その……」

道案内をしてもらうつもりで声をかけたわけではない男は優にどう返答するか困っていた。無論、優も道案内のつもりで声をかけたわけではないが。

瞳はその隙をついて男の手を振り払い、優の腕を掴んだ。

「っ……行くこう！」

「わっ！」

「あっ、おい！」

瞳は男から逃れるために、優が驚いたのを気遣わず、走り出した。男は追いかけてよとしたが、速さで高校生に勝てる訳もなく、諦めるしかなかった。

「はあ……はあ……」

どうにか家近くの公園まで走ってきた瞳は優の腕を離して、息を整えていた。優はそこまで息は乱れておらず、瞳を気遣っていた。

「夕立さん、大丈夫？」

「……うん……なんとか……」

そして、改めて恐怖を感じる。もし、あの場に優が来なかったら。あのまま、恐怖でなすがままだったら。

「っ……！！」

「夕立さん！？」

瞳は道端にもかかわらず、その場に座り込んだ。いや、座り込んでしまった。恐怖が体を支配していく。

(震えが……止まらない……怖い……)

ガクガクと震える瞳を見て、優はどうしようかと考えていた。そして、公園にあった植物の葉を一枚ちぎり、口元にあてた。

……

「……草笛……？」

瞳はその草笛の音色に聞き入っていた。優しくて、包み込むような音色に。そんな音色のおかげで、体の震えはすっかり止まっていた。(いい音色……けど……何処かで……)

恐怖から解放されて安心してしまったのか、瞳はその場で意識が遠のいてしまった。優は、倒れかけた瞳をそっと抱きとめる。

「まったく……目が離せない。気をつけてくれ。」

優は困ったような、しかし優しげな顔でため息をつきつつ、瞳を起こさないように頬を撫でる。そして、先程の男のことを考えた。すると、彼の目は吊り上がり、表情も消え失せる。

「さて……どのようにして裁いてやろう。」

そう呟くと、瞳を抱き上げ、家に送り届けるのであった。

「んっ……うん……？」

瞳はゆっくりと目を覚まし、自分が寝ている場所を確認する。寝ていたのは、家のベッド。しかも、自分の部屋のものだ。

「あれ……確か……私……」

「瞳さん！よかったあ……」

現状を確認しようと頭を働かせたところで、静がホットココアを持って、部屋に入ってくる。

「寝たまま帰ってきたから、ビックリしましたよ……今は夜の八時ですよ。」

「私……いったい……」

現状をよくわかっていない瞳に静が説明をしはじめる。

「同じクラスの山中さんという方が運んでくださったんですよ。帰り際に『お大事にと伝えてください』と言われましたよ。」

「山中君が……」

確かに、あの状況で運べるのは優ぐらいだっただろう。瞳も冷静に考えてみれば、すぐにわかることだった。

「今日はゆっくり休んでください。明日は土曜日で学校も休みですから。お夕飯はどうしましょう？」

ショックを受けたが、予鈴が鳴ったから席に座っただけと判断した瞳は深く気にせず、席に座った。

「おはよう、夕立さん。」

「っー！」

未だに背後に男性がいることに慣れない瞳は、優の挨拶を聞いた瞬間に逃げ出そうとしたが、予鈴前であることを思い出し、心を落ち着けてから静かに振り返った。

この時の瞳は、昨夜の事や先程の花菜の行動に気を取られ過ぎて、『木の笛』と優の繋がり疑惑をすっかり忘れていたらしい。挨拶だけで頭がいっぱいである。

「おは、よう・・・」

「うん、おはよう。」

優はニコッと笑って瞳を安心させようとするが、瞳は男性自体が苦手なので怯えている。しかし、それでも、少しずつではあるが、距離は縮まっていると思われる。

その様子を観察していた一樹はふと、思った。

（このまま山中と仲良くなっていいたら：瞳の男性恐怖症も治るんじゃないか？）

幼い時から男性を見て怯えていた幼馴染が男性恐怖症を克服したら、この上なく喜ばしい。一樹はそう考えて二人のきこちないやりとりを見つめていた。

だからこそ、気づかなかったのである。花菜が切なげに自分を見ていたことに。

「はあ・・・」

帰宅途中、瞳は何回目かのため息をついた。結局、よくわからないまま、花菜には一日中避けられていたのだ。

体育では別のペアだったり、いつもは屋上でとる昼食を他の友達と食べると言って食堂に行き、帰りは教師が帰宅合図を出したと同時に逃げるように教室を出て行った。

「知らない間に花菜の気に障るような事をしてしまったのかしら・・・」  
高校に入学して、初めてできた友達。瞳にとっては、かけがえのない存在だ。だからこそ、失うことが怖くて仕方ないのだ。

「はあ・・・事情を聞くしかないわよね・・・」

瞳はメールで事情を聞こうと思いい、ケータイを取り出す。

「あのお・・・すみませ〜ん。」

しかし、本文を打つ前に背後から男に声をかけられ、瞳は恐怖で硬直してしまった。ゆっくり振り返ると、笑顔を張り付けた三十代後半と思われる男が立っていた。

「この駅に行きたいんですけどお・・・どう行ったらいいですかねえ？」

馴れ馴れしく瞳に近づき、地図を指さす男。この雰囲気は瞳は幼いときを感じた。

（怖い・・・嫌だ・・・）

「よかつたら・・・一緒に探してくれませんかねえ？」

「あ・・・わからないので・・・」

本当は知っているのだが、この雰囲気ではただの道案内にならないと本能で感じた瞳は逃げようとする。しかし、逃げるための一歩は踏み出せなかった。

「わかるよねえ？教えてよお。」

腕を掴まれ、瞳は声にならない叫びをあげた。恐怖で顔色が悪くなっ  
ていく。

「ただの道案内だからさあ？ねえ？」

「いや・・・やだ・・・」

足が震えて動かない。掴まれた腕を振りほどくこともできない。瞳は恐怖で頭が真っ白だった。

（・・・誰か・・・！）

「何してるんですか？」

そんな状態だった瞳に声をかけたのは優だった。瞳はその声で、少しはあるが冷静さを取り戻した。

「えっとお・・・」

「道案内ですか？わかるところなら、案内しますよ？」

「警戒する必要はない。俺はお前に決して危害は与えない。」  
ハッキリと危害を加えないと言い切る桐伏に瞳は頷くことしかできなかった。飛んでいったはずの恐怖が戻ってきて、瞳の心を染めているのだ。

「一つ、忠告しただけだ。」

「忠告・・・」

「しばらく見るな。危険な目に遭うぞ。」

瞳はそれを聞いて、やはり驚き、考える。何故、桐伏がそのようなことを断言できるのだろうか。

「・・・貴方は・・・何を知って・・・」

「それだけだ。じゃあな。」

「あつ、ちよつと・・・」

瞳が質問する前に、質問を拒否するように桐伏は屋上から飛び降りて、姿をくらませた。瞳はしばらく茫然としたままだったが、五分後にハッと我に返り、帰宅した。

帰宅した後、瞳は風呂に入った。湯船に浸かりながら、瞳は昔の事を思い出していた。

（何で・・・妖狐が知っているの・・・まさか、見られていた・・・？）

そこまで考えて、そうとしか思えないと考え、同時に身震いがした。恐怖で体が震えているのだ。

（忘れたかったのに・・・まだ覚えてる・・・あれ？）

瞳はふと、疑問に思った。

確かに強姦まがいのことをされかけたが、強姦はされていない。気づいたら、一樹や静、両親の傍で泣いていたのだ。誰が助けてくれたのか、瞳はまったく記憶になかった。

（よく考えたら・・・私は誰に助けられたのかしら・・・）

同じ年齢であった一樹はまずないだろう。では、警察だろうか。両親だろうか。それとも、他の誰かなのか。

（・・・それだけ・・・それだけが思い出せない・・・）

瞳は思い出すことを諦め、湯船からあがった。

## 第四章 隠し事

「ひーとーみー！数学の宿題見せてくれよー！」

一樹が教室で幼馴染の名前を叫ぶ。名前を呼ばれた瞳はもちろん、注目の的である。

「一樹・・・私の名前を大声で叫ぶのは止めてと言ったでしょう・・・」

「あー・・・悪い。」

あまり反省しているようには見えないが、瞳は仕方ないため息をつき、一樹に数学のノートを渡す。

「昨日は花菜が見せてくれたでしょう。」

「そうそう。で、今日も借りようと思ったらさ、まだ来てなかったんだよ。」  
「花菜はまだ来てない？」

いつも一樹より早く来ている花菜が、間もなく予鈴が鳴る時間になっても来ていないのだ。すると、チャイムが鳴ったと同時に教室の扉が勢いよく開く。

「おはようっー！」

息切れをしながら、花菜は教室に入って、挨拶をする。一樹と瞳は少し驚きつつ、花菜を迎える。

「珍しいなー桜井がオレより遅いつて。」

「あつ・・・ちよつとお腹痛くなつて・・・」

歯切れが悪いのは息切れをしているからだと言った。しかし、それは次の行動で違うことが判明した。

「大丈夫？無理、しないでね？」

「・・・」

瞳の心配している言葉には返事をせず、花菜は席に座った。明らかに瞳を避けている行動だった。一樹も多少、疑問を感じた。

「桜井、どうしたんだ？まあ、瞳も気にすんなよ。」

「そうね・・・」

のために、ではなく、自分のために。元々、霊気と呼ばれるものを持っており、幽霊の類は見えていた。

そして、毎週木曜日に行くのが見回りだ。木曜日の理由は、見回りを始めた頃に幽霊が一番多く現れたのが木曜日だったからだ。

「よっと・・・」

瞳は準備を終えると、窓を開けて、木に移り、地面に静かに降りた。見回りの時間は七時半から八時半。静が食器を洗い、お風呂を沸かす時間だ。

「いつてきます、静さん。」

聞こえないように、小さな声で瞳はそう言うと、裏口を開けて夜の道を歩き出した。

### 第三章 妖狐

瞳が本日の見回りの対象にしたのは自分の学校。花菜や一樹が言っていた噂が気になり、様子を見に来たのだ。今のところ、変わった様子はない。

「時間が関係あるのかしら・・・」

・・・~~~~~

「!・・・屋上から・・・?」

笛の音のような音が屋上から聞こえ、瞳は門をよじ登り、学校に侵入する。監視カメラ、警報などは存在しない。何故ならば、貧乏高校だからである。校舎には、鍵が壊れている扉から入った。

「この上から・・・それに、これは朝にも聞こえた・・・?」

聞こえているのは朝に聞いた不思議な音色。幸い、瞳が入った校舎の屋上から吹いているようだ。

瞳は笛を吹いている者に気づかれないように慎重に足音をたてずに階段を上って行った。

瞳が屋上に着いたと同時に、笛の音が止む。屋上を見回しても誰もいなかった。

(この音は今日の朝、聞いたもの・・・そして、この笛を吹いていた者は私をおびき寄せようとしているような・・・)

理由はわからないし、証明するものもない。あくまで瞳の直感だ。

(いったい何処に・・・)

「背後を取られるな。後々、大変なことになるぞ。」

「!？」

すぐ後ろから声をかけられ、瞳は困惑したと同時に恐怖を感じた。瞳の中で、背後にいるのは男のようだとかわかった。

「っ・・・!」

瞳は急いで距離を取ろうとしたが、失敗した。沢山の葛が巻き付いてきたからだ。そして、体の向きを変えられ、声をかけてきた者を真正面から見るようになった。

「っ・・・妖狐・・・?」

白銀の髪、狐の黄色い耳と尾、人離れた容姿。目の前にいる者は妖狐と呼ばれる、狐の妖怪であった。

「いかに。俺は妖狐族の桐伙(きりか)・・・お前と話がしたくてな。」

「・・・離し、て・・・別に逃げ、たり・・・しないから・・・」

男性恐怖症の瞳は、男性と対峙するだけで怯え、逃げようとする。桐伙は暫し考える素振りを見せ、瞳を捕らえていた葛は外し、ドアを開かせないように封じた。瞳はすぐに後ろにさがり、桐伙と距離をとる。

「何が、目的なの・・・」

「そう怯えるな。お前を傷つけた男みたいな真似はしない。だから、安心しろ。」

「えっ・・・!？」

瞳は驚きのあまりに恐怖が飛んでいった。

瞳は確かに、5歳のとき、誘拐されかけたときに強姦まがいのことをされ、男性恐怖症になった。そのことを知っているのは警察以外ならば両親や静、幼馴染の一樹だけだったはずだ。

(会った・・・ことはない・・・では、何故・・・?)

「・・・山中、君は・・・どうなの・・・」  
消えそうな声で瞳は優に質問した。話しかけられると思っていなかった優は少し驚きながらも、ニコツと笑って答える。

「よかったら、夕立さんにも案内して欲しいな。やっぱりクラスの皆と仲良くなりたいし。」

「・・・わかっ・・・た・・・」

諦めたような、怯えるような声で返事をした瞳は優から顔をそらし、逃げるようにお手洗いに行くのだった。

## 第二章 霊気

昼休みになり、瞳は一樹、花菜と一緒に優に学校を案内していた。しかし、さほど大きくもない学校の案内はすぐに終わってしまった、優から三人への質問タイムとなっていた。

「部活は何かしてるのかな？」

「ワタシ、コーラス部！今度、大会あるから見に来てネ！」

「オレはバスケット結構、できるんだぜ？」

「・・・帰宅、部・・・」

瞳も徐々にはあるが、優に慣れてきたようので、会話は成り立っていた。優もそれが嬉しいようで、微笑みながら瞳を見つめていた。

「あ、ねえ、こんなウワサ知ってる？」

花菜が思い出したように話し出し、質問タイムは終了した。

「『木の笛』ってウワサ。聞いたことないかな？」

「『木の笛』？」

「オレは知ってるぜ。センパイ達から聞いたからな。」

瞳は聞き覚えがなかったが、一樹は知っているらしく、話し始めた。

「学校の近くに住んでるセンパイから聞いた話、一か月前くらいから夜の学校から笛の音が聞こえるんだってよ。それも、毎週木曜日に。」

「だから『木の笛』？私の家もけっこう近くだけ聞こえないから、本当に近くじゃないと聞こえないみたいね。」

「へえ、一ヶ月前だったら、俺がここに来たぐらいだね。」

(同じ・・・時季・・・?)

何気なく優が相槌を打ったが、瞳には違和感があった。

一か月前から鳴り始めた笛の音。時季外れの転校生。はたして偶然といえるのだろうか。

「ただいま帰りました。」

「お帰りなさい、瞳さん。」

帰宅した瞳を出迎えたのは、家政婦の平野静（ひらの しずか）だ。

瞳の両親は海外で貿易関係の仕事をしており、帰ってくるのは盆、クリスマス、それから瞳の誕生日ぐらいだ。

「もうすぐしたら、お夕飯ができますからね。」

「ありがとうございます。着替えたら手伝いますね。」

瞳はそう言うと、階段を上がっていった。そして、部屋に着くと、転校生の事が頭に浮かんだ。

(山中優・・・今日は一樹と一緒にいたけど、特に怪しくもなかった・・・けれど、あの言葉は気になる・・・それに、今まで気づかなかつたけれど、私が『例の事』をしている木曜日に鳴っている笛・・・何か関係が・・・?)

瞳はそこまで考えてから頭を振って、一度冷静になる。そして、服を着替えて静の夕飯準備を手伝いに行くのであった。

「いっそうさまでした。」

「お粗末様でした。」

夕飯を食べ終え、静は食器を片付け始める。瞳は部屋に戻ると再び着替え始めたが、着替えたのはただの服ではなかった。着物と呼ばれるものだが、袖がなく、丈は短い。着替えたあと、いつもはポニーテールにしている髪を毛先のほうで緑の布を巻いて止めておく。そして、最近では肌寒くなってきたので上着のかわりに青色の衣をはおしておく。

瞳はある事をきっかけに、陰陽師の真似事をするようになった。誰か

「どんな子かな？」

「男？女？」

「楽しみだなー！」

瞳も言葉に出さないものの、内心で驚いていた。今は夏休みも終わって早一ヶ月、転校してくる時季ではない。

「はい、静かに。では、入って。」

教師の合図と共にドアに注目が集まる。入ってきたのは、肩ほどの長さの黒髪の男子だった。顔立ちが良かったため、女子がさらにざわつく。教師はざわつきを止めるか考えたが、諦めて黒板に『山中優』（やまなか ゆう）と書いた。

「山中優君だ。ご両親の都合で引越してきたそうだ。」

「よろしくお願いします。」

ニコツと笑う優を見た大半の女子生徒は心を撃ち抜かれたことだろう。

「席は・・・小田の隣だな。」

「おっ、マジか？」

「えっ・・・」

名前を呼ばれたのは一樹であって瞳ではない。だが、一樹の席は瞳の斜め後ろ。優の席は瞳の真後ろだった。優はそれを確認すると、席に座って一樹と挨拶をかわす。

「じゃあ、仲良くするように。以上。」

教師はそれだけ言い残し、教室を出て行った。それと同時にチャイムが鳴り、転校生である優の周りには生徒が群がる。時季外れの転校生の噂を聞いた他クラスの生徒も一目見ようと廊下に集まっていた。

「すごいねーあんなに集まってるー」

「一樹まで・・・」

花菜は驚きながら群がる様子を眺めている。花菜の席まで来ていた瞳は一樹が群にまじっていることに半ば呆れながら視線をそらす。

「おい！ひーとーみー！」

突然、一樹に呼ばれて瞳は嫌な予感を覚えつつ、振り返る。すると、すぐ近くに優が立っており、瞳は怯えるように数歩離れた。

「あつ、やべっ・・・」

「瞳ちゃん、どうしたの??？」

突然の行動に花菜は首を傾げる。離れたれた優も少し驚いている。一樹だけは呼んでから、しまった、というような顔をした。

「あー・・・悪い、うっかりしてた・・・ごめん、瞳。」

「いや・・・」

「?」

幼馴染同士で理解しているようだが、瞳と友達になって半年ほど経つ花菜や転校してきたばかりの優にはわからなかった。

「小田くん、瞳ちゃんどうしちゃったの？」

「えっと・・・昔、色々あつて男性恐怖症なんだよ、瞳。オレとか親父さんは平気なんだけど・・・」

「ええ!? 知らなかった・・・」

一樹は多くを語らなかつたが、瞳の様子を見る限り、よほど怖い目にあつたのだろうと予想できる。だが、花菜が友達になつてから知る機会がなかつたのは、入学してから、もうすぐしたらある体育祭まではクラス全体の大きな行事も無く、瞳は帰宅部で委員会にも入っていないため、男子と関わる事がほとんど無かつたからである。

ちなみに、瞳自身が一樹以外の男子との関わりを避けていることも、花菜が知ることにならなかつた大きな要因かもしれない。

「・・・で、一樹。何の用？」

「えっ、ああ・・・山中の学校案内、昼休みにしようと思つてさ。」

「あつ、ワタシも行きたい!!」

一樹の提案に花菜が手を挙げて参加を希望する。瞳は洗い顔をしながらチラッと優を見る。すると、あちらは瞳をずっと見ていたのか、またはタイミングが良かったのか悪かつたのか、目があつた。

「っ・・・」

「あ、瞳は別に無理にとは言わねえからさ！ただ、オレよりはちゃんと覚えてる瞳の方がいいかと思つてさ・・・」

目があつただけで少し怯える瞳を見た一樹が慌てて口をはさむ。花菜もオロオロしながら瞳と優の言動を見守る。

# 妖伝説〜白銀の狐と人間の恋物語〜

橋本 亜依

(山本 淳子ゼミ)

## 第一章 出会い

高校に入学して早半年。挨拶やお喋りで賑わう中、朝の教室で情けなく叫ぶ声があった。

「瞳ちゃんー英語の翻訳見せてー!!!」

叫ぶ友人に、ため息をつきながら夕立瞳（ゆうだち ひとみ）は鞆から英語のノートを取り出す。

「花菜：たまには自分でしたらどうなの：：あと、名前を叫ばないで。」

瞳からノートを受け取った桜井花菜（さくらい かな）は小動物のよう縮こまり、半泣きになりながら言う。

「だって〜瞳ちゃんならゼツタイにやってるし：：でないと、成績でオール5とかムリだし〜：：」

この言葉からわかると思われるが、瞳は頭がいい。さらに、運動神経もよく、性格も一般的に良い分類なのでクラスでは頼りになる存在になるうえに、父親が外国人ということもあってハーフで美人。まさにマンガに出てくる『できる人』というものだ。

「桜井は相変わらずだな。」

「あ、小田くん!」

「一樹。」

話に入乱してきたのは同じクラスの幼馴染である小田一樹（おた かずき）だ。見た目はチャライが、頼りがいのある兄貴分である。

「：：で、この手は何かしら?」

「いや〜：：オレも見せて欲しくてさ、数学のノート。」

「貴方も毎回でしょう：：」

「頼むって〜!今日は当たりそうなんだよ〜!」

再びため息をつく瞳に、一樹は必死に頼み込む。そのやり取りを聞いていた花菜が鞆から数学のノートを取り出し、一樹に渡す。

「間違ってるかもしれないけど：：よかつたら：：」

「マジで!?! やった!?!」

「花菜、甘やかすとつけあがるわよ?」

大はしやぎする一樹を横目に瞳は花菜に話しかける。花菜は翻訳の書き写しをしながら苦笑する。

「小田くん、いつもクラスのために色々してくれるし、これぐらいならいいんじゃないかな?」

「：：まあ、そうね。」

色々納得した瞳は苦笑し、チャイムが鳴る前に来る教師を確認し、席についた。耳は教師の話聞き、目は、赤く色づき始めている校庭の木を眺めていた。

(もう秋か：：)

：：〜〜〜

(えっ?何、今の：：)

微かに、気をつけていないと聞こえないぐらいに、何かの音が聞こえた。瞳は教室を目線で見まわすが、聞こえていたのは瞳だけのようだ。

(気のせいかしら?けど、聞いたことがあるような：：)

「：：では、転校生を紹介する。」

行事等の連絡を終えた教師の言葉にクラスの皆がざわつき始める。